業 界 短 信

（２５年1月）

キヨシゲ、田中鉄工所を完全子会社化（鉄鋼新聞、１／１７）

㈱キヨシゲ（浦安市、小林光徳社長）は、プレス・溶接・機械加工を手掛ける田中鉄工所の全株式を取得、完全子会社化した。両社の取引関係は 50 年近くにわたる。田中鉄工所はワイパーなど車両用の防振装置向けゴム製品のプレス加工で実績を重ね、損技術力の高さには定評がある。ただ、高齢者が高齢で、後継者も不在だったことから、信頼関係にあるキヨシゲに事業継承を打診。その要請にキヨシゲが応える形で、今回の M&A が成立した。事業拠点や設備体制はは従来と変わらず、田中鉄工所は各種プレス機を有し、最大加圧能力は５００㌧。このほかに板厚８ミリまでに対応する連続ブランキングプレスやロボット溶接、旋盤やフライス盤などを保有しており、切削や溝切りなど機械加工も内製する。キヨシゲは浦安鉄鋼団地内で各種鋼材の一次加工からプレス、曲げ、穴あけなどを手掛けるが、田中鉄工所との一体運営で加工領域をさらに深堀し、高度な独自技術と特徴・機能を武器に顧客サービスを更に高める。

日鉄神鋼シャーリングとシーヤリング工場が合併（鉄鋼新聞、１／２１）

新日鉄住金は１８日、関西地区における厚板溶断加工事業の連結子会社である㈱日鉄神鋼シャーリング（大阪市此花区、浅野博之社長）と㈱シーヤリング工場（堺市西区、永吉明彦社長）の２社を合併すると発表した。合併時期は２０１３年度上期中で、早ければ４月１日を目標とする。国内厚板戦略強化の一環で、最適な生産・稼働体制の構築と強靭なコスト競争力の実現に向け、新日鉄住金は日鉄神鋼シャーリングとシーヤリング工場の事業統合を検討してきたが、生産拠点が近接する両社を合併することで基本合意した。存続会社は日鉄神鋼シャーで、本社も現在の日鉄神鋼シャーに置くことが決まったが、新社名や資本構成など合併に関する詳細については、これから編成する３社メンバーによる「合併検討チーム」で検討し、詰めていく。

玉造㈱、溶接 BH 事業を拡大（鉄鋼新聞、１／２１）

玉造㈱（札幌市、西村孝治社長）は、溶接 BH 製造部門で、昨年９月にラインを増強し、有資格者の育成にも力を入れるなど全社で体制強化を図り、昨年１２月２６日付けで日本鉄骨評価センターの溶接 H 形鋼製作工場に新規に認定された。今回認定された工場は夕張郡長沼町の恵庭工場 BH 課で、認定区分は A。同社は０３年に門型サブマージアーク溶接ラインを導入し BH の製造を開始。昨年９月には台車サブマージアーク溶接ラインを追加設置して、２ライン体制へ設置を強化した。「次の目標は AA の取得。“品質に責任”、“納期に責任”をさらに徹底し、お客様に安心して使っていたいただける企業であり続けることが使命。大きな成長分野に成長させるため、全力で取り組みたい」（西村社長）との意向だ。

飯塚鉄鋼、鋼材センター追加拡張（産業新聞、１／２２）

㈱飯塚鉄鋼（姫路市、岩城正治社長）は、今年夏を目処に鋼材センターを増築する。既に隣接する土地（約 2300 ㎡）を購入済みで、約 1600 ㎡の建屋を建設する。増築棟では条鋼など一般鋼材を在庫する予定。現在、主力の本社工場ではプラズマ、レーザ、NC 溶断機などの切板設備、及び鋼板用の開先機を用い、建機、産業機械、重電、造船関連向けに厚板加工を行うとともに、鋼材センターで一般鋼材の在庫販売を手掛けている。鋼材センターは、昨年１１月に拡張工事を実施した。拡張部分出は取引先の建機メーカーから厚板を預っている。ただ一般鋼材の在庫充実化を一段と進めるには、鋼材センターの更なる拡張が必要になっていた。

三幸金属工業所、高級鋼加工で差別化（産業新聞、１／２３）

㈱飯塚鉄鋼（姫路市、岩城正治社長）は、本社工場のレーザ１基の増設とプラズマ１基の更新が完了し、４月１日から本格稼働させた。レーザは小物切板の高品質対応の強化が目的で、プラズマは老朽化対策と開先を含めた生産性能の向上ねらい。投資金額は約１億 5000 万円。同社は本社工場の加工設備はＮＣ溶断機、プラズマ、レーザ、開先設備があり、建機、重電、産機など各種用途向けに切板、２次加工を行っている。